

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■いちご 高温傾向の本年のいちご栽培状況

東濃管内では、5経営体で約1.3haのいちご栽培が行われており、高設栽培で早いものでは8月末から順次定植が行われている。

農業普及課では、定植や施肥開始時期を見極めるため、9月中旬から顕微鏡観察による花芽分化状況の確認を行っている。

いちごは一般に25℃以下・日長13時間以下の条件で花芽分化が促進されるが、今年は9月になっても気温が下がらず、分化が遅れている。具体的には、8月下旬からの気温が11年前と比べ1℃、平年値に近い10年前と比較して2℃高く、花芽分化は調査データのある11年前と比べ2~3日、10年前と比べ5日以上遅れとなっている。

いちごは、来年の初夏まで長期に渡り栽培が継続するため、今後の温度・肥培管理の適正化により生育の遅れを最小限とし、安定した収穫が見込めるよう、農業者を支援していく。



【いちごの花芽の検鏡】

■水稲 新たな酒造好適米の試験栽培

瑞浪市日吉町の農事組合法人では、数年前から中山間農業研究所で育成された酒造好適米の試験栽培を実施しており、本年度は3筆・約40aの作付けを行った。

9月上旬に成熟期となったため、同所中津川支所と協力し、試験ほ場で適期刈り取りの指導を行った。梅雨明け以降の気温が平年よりも高く推移したため、昨年よりも4日早い刈り取りとなった。

この酒米は、心白率が低いなど醸造適性に優れており、さらに地域の気候に適しているとして酒蔵からも期待されている。来年度は、他の営農組合でも試験栽培を行う予定であり、引き続き作付面積を拡大することとしている。

今後は、試験栽培結果に基づき栽培暦を作成し、次年度以降、安定的に多収生産ができるよう支援していく。



【適期刈り取り指導】

地域資源を活かした農村づくり

■水稲 べんがらモリブデン展示ほの収量調査

多治見市北部の営農組織では、令和4年度から高齢化や担い手不足に対応するため、省力化と低コスト化が可能で山あいの狭小な圃場でも導入しやすい「水稲べんがらモリブデン直播」の試験栽培を行っている。これは、べんがら（酸化鉄）を主成分とする資材を使うことで、簡易に種子を被覆できることが特徴であり、2年目となる今年は、栽培面積を拡大し検討を進めている。

7月までの生育は順調であったが、その後、天候不順によりいもち病による影響が懸念されたことから、防除指導を行うとともに、9月には生育状況を確認するため坪刈を実施した。

今後は、収量調査や品質分析を行うほか、次年度からの本格実施に向け、必要となる機械の導入を検討することとしている。



【試験栽培ほ場】